



すぎもと はじめ
杉本 肇 さん

1961年1月18日生まれ

水俣病患者家族。母は杉本栄子さん（2008年死亡）
家族が水俣病になったときのこと、子どもの頃の生活、都会に出て水俣に帰ってきたこと、自分の身体の調子などを語る。

無添加のいりこなど漁業を営む。

2008年5月から水俣病資料館の「語り部」となる。
水俣市袋在住。

私の家族は代々網元で、たくさんの網子さんが私の家に来ていました。ある日、祖母の手が突然震えだし、病院に運ばれましたが、原因がわからないということで隔離病棟に入院しました。退院後、村の人達は伝染病・奇病にかかったと差別やいじめが始まり、家には誰も来なくなりました。その後、祖父は劇症型の水俣病で亡くなり、両親も発病し、入退院を繰り返し大人のいない暮らしが始まりました。私は5人兄弟の長男です。両親が救急車で運ばれ入院した時、誰にも相談できませんでした。弟たちをどうやって育てていこう・・・そんなことを毎日考えていました。兄弟5人が写った一枚の写真があります。そこにはやせ細った不安げな子供たちがいました。両親は退院して来た時、寝たきりで何もできないんですが、弟たちはとても喜んで、母の看病をしていました。そこにいてだけで“親”というのはすごい宝なんだなど、その時思いました。

両親は、状態がよくなると漁に出るようになり、私も小学校4年生から漁の手伝いをしました。朝4時半に起きて漁に行ってから学校に行っていました。学校に行ってもいじめられると思い、家族に水俣病の患者がいるという話はできませんでした。被害者と加害者、その家族が同じ地域、同じ教室にいるということで、誰も触れられない“病気”でした。十年前にやっと水俣病のことをみんなに語り継いで理解してもらおうと母は語り部になり、水俣病は“のさり”だと、自分の体験を語り、多くの人に勇気を与えました。

社会にはいろんな差別や偏見があります。被害者になったら、加害者になったらという想像力を膨らませてこれからも生きていって下さい。人は役目が必ずあります。どんなつらいことがあっても生きるということをあきらめないで下さい。

【写真；両親が入院している頃の兄弟】